

管理職って、俺のことか

川喜多 喬

いたく労働法学者に同情している。気の毒にも役人や組合幹部のために労働者の定義とか、さては労働者の中でも管理職の定義とかを考えてやらねばならぬ。いたく労働経済学者にも同情している。管理職の賃金などと言って算数をやるには、やはり定義をせねばならぬ。

「薔薇を薔薇と呼ばぬとも、香しさには変わりなし」と、シェイクスピアを引用したのでは、研究雑誌には載らない。で、定義せねばならぬ。かつてリンカーン大統領のところに陳情団がきて、法律で定義を拡大解釈して補助金をくれと言った。リンカーンは言い出した、「諸君、ロバの足が5本であるとする。いま、ロバが4頭いる。ロバの足は合わせて何本かね?」「20本」と答えた陳情団長に、リンカーンは諭した。「違う、16本だ。定義で事実を変えられない。そうじゃないかね?」

しかし事実が多様である場合は、こうも言えぬ。古代中国伝説上の帝に舜があり、舜は登用した龍と言う名の部下、すなわち管理職に、自分の命令がまともなものかどうかチェックする役割を与え「納言」と名した(言葉を出し入れする、ってこと; 従って納戸の納)。ここから日本の大納言、中納言、少納言に到るわけであるが、納言をば中納言あたりの事実に照らしてこうだと言えば、少納言は俺はそれほど偉くないとつぶやき、大納言は俺はそれほどヒラじゃないと怒るであろう。

川の平均の深さが40センチであるからといって、川に足を入れて渡り出す人はいまい。一方、極めて多様な管理職について平均像を描こうってのを誰かが止めない故は、論に溺れても誰も死なないからだ。が、管理職の定義を法律でやらかして縛れば、どこかで何かが流されよう。

管理とか管理職とか、いつ誰が使い始めたか知らぬが、江戸時代以前ではあるまい。それが英語

圏のマネジメントやマネージャーに相応するか、言い難い。フランス語のマナジュマンはどちらかといえば家事雑事の取り仕切りだから、ファイヨールが初めて「経営学」の本を書いた時には、経営管理をアドミニストラクションと言った。が、マナジュマンと同じラテン語から来て英語に入ったマネジメントは、馬の制御で、司馬であり、トップのお仕事。雑事を取り締まる第一線監督職からトップマネジメントの参謀まで同じ管理職だとして何か重要なことがわかるのであろうか? 居酒屋の店長から銀行本店の融資課長、型枠現場の職長からハイテクベンチャーの総務部長……いろいろですぬと言う私は、おかげで論文など書けないでいる。

中間管理職に限定せんか。ミドルマネジメントという英語が初めて記録されるのは1950年代後半のアメリカで、ミドルマネージャーという英語が初めて記録されるのはその10年後である。半世紀もたらずミドルマン切り捨ての時代になる程変転已まぬ。全てを明らかにしようと思わず、意味ある少数の型を徹底的に研究したらどうかと私は大学院生に勧めるが、何が意味あるか私にも分からぬ。最近ある大学院生が、最近の管理職はプレイングマネージャーとなりつつあると言うから、呵々大笑するのが関の山。

管の語源は管楽器。笛吹いて踊らせるのが管理職の役割で、笛を吹くはもとよりプレイであろう。理を扱っているかどうかは不明。最近の部下は理窟で動かない。ゆとりを言って動かぬ部下が残業代をせしめ、そこからはエグゼンプトだ(最近、とにかくカタカナを使うと高尚に見えるようだ、ファミフレ、デュアルしかりである)と言われて働き続ける俺は、そうか、管理職だったか?

(かわきた・たかし 法政大学キャリアセンター センター長(教授))